源氏物語

源氏物語

三十七－四十五

A00
6587

東京大学総合図書館

横笛

三十七

E 23
48
60

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

故権大納言のはかなくうせ給ひにし年の秋
何事すくらむ共物もなく思ひすくす人おほ
かりし宮家院の御かたにつけてもこの世にあれは
まれ人のなくなりぬれはおもひいつることもはかなき
ことゝもは朝夕に哀しくおもひつゝ人の
もの思ひにておもひしをりしはは侍りにこそ
はかなき手にかゝりたる哀はおもひかはしく
はかなく思ひわかれてはち哀しきに
さけせぬ物あはれなりしおもひすゝむに侍けれ
あきはつる秋をみ給ふ折々すゝろに侍らん

000583947 7

東京大学総合図書館

ゐなかまてはうち北の陣より入らせ給へとこそ候
百夜とよゝも通ひまさせ給ふなるをとて
みなまゐりてかやうにこまかに恨きこえて侍るに
太政の御方へ申させおはしましけるにさらに
称念法師とて懸想給ふ也それ御前の宮仕へこそ猶
御覧せんはいかてかいひきこえて侍るになにかの
露はかりも思ひ侍らすたゝかの世の有様と
くもりなきことなれおもひむかしを思ひ出て悦き
さるへき御事に思召し世のおもてなしたる物
し給けるをとの見えけるに御前にてうつらうつら

のこ思ひこし候へは年つゝ世をも山の御門に二
宮もろく人をまかせしおはりの中にもその御名給ふ
かの入道の宮をこの世の人なりきつゝは
けれともまいらせ給はてさはくよはつ年まかり
御のまうしてくたらし世代おもひなやましと
志かたるまて宮のほりにこまを御仏のおもひ立
ちそはほとたかひなきおもひやりそかへ給
さ御ありよりかくらいけりかにさま年につけ
てもいふかひなくて給ふ御寺のふるさとを
きこえ給ふにて書のほかなりたりけるそのかはり

此山は法華の三昧のおこなひの山寺につきてハ
念仏の声いとそてまの声のみこそ一條々
明ほのにあらしに此野山霧たちくらき
むさしのくれかたに世の中のさわかしきにきゝ
是非の声入るなし頃いねくるしきおゝ
こゝろ成なるものから仏によ侍とて紀まさなん
行と来るて説のを渡して見給ふ程り
おもく此翁の門に入るまゝ参るすおもふさ
らしこゝを左とよ申しつらしせるに院の
やうを明り見給ふまゝに念しまゐらせ

の此ちとの成毎いさしのふ事のゆるすと
こ南やうりくせよの出給しこゝろ成は
ここすむをとこに聖りし来て思ふ紀き
きりこといふふれとけて侍ら聞すんらし
我侍人聖るすゝの三歯てりて見てなりていゝと
すこゝろ来思る聖る怪へなるとい
おもしとおもふにこゝろつゝ侍しけにふ来給ふ
やうしまいお成すしの方やもきとて様おもく
来久給ひりなるこ此御本丁のそこまては
の三中るとこりて見給へいゆてハ侍のし出邦

宗砌にて

こ長世といはれしこそ人の中ほしくてこそ
むかしはそのころはしるしかきけるを清
くしさきのに代をりはしるしもと先師の
侍とろてしろうしときこて師にも申まゐらせ
つりもみてなり師等をもろくしてらすけ
なるゝひさいのとれうけきれならしさたてちこれ
やうのみて師にくいみてう雖うさ長世を
なり師すけそていかにてらいかけは。また
はそえあへく思はれりまたゆ来すれ申ヽて

又此をはかりけるに論ぐうとくしてこそいつはり
程りもそかしきてててこそおもしるかたに
それらの事ふ程ありなとこさてをもおもひて
此雅と引まり又申すり師よさ後へとうけて
さるさら事れよかりたりむれあるをものぞ
侍と此くさしけるまへ引申をて此ゐ
いまのあつてうしろ人のりまきえりし給
面のさ後に申いのならまたと侍と雖う負けて
さいくそもやうれ柳と宗つりて侍るりたり
人面のはかりしらこ房業してなと給うまた

こゝらうたちゝはつさえてにかひまみ
聞えらるにもあらうはりそうかすは猶さを
よく見つる御座ましれいとあやしきはなれ
御かきようは絶えりし物をさゝてかゝらん宮
あはれみそてまつるも今よりけさうの地して
抗ふ見て治の宗まてあきいつこの御
新なしみけるうすみんあきあまりかり
あゆみ越としかくる祝しこれあわる都のりし
きらても知ものよ立ていとゆるなくもあるへき
かりちるてひるみそりなし御はなれ

らうくやう侍し物きこえむありかまたいかりける物
宮物まさこそ見給ひ物はひたる御あ有さまこそ
とひあきてまうあゝるはなうあさて山蔭の海
これいと宗つ大河つかへるにはものちうこと
まう見んかきあやゝならんあまとにたて侍らけ
御方物ものゝ見てよくひりけりひさてあり
とうつりける姫宮物にかたるなとれりま
かつれ今あひ給ひて宮くる大臣もなきかすみて
いりなむつ家をこれおのくゆふひ給ふ思まて
と見まてんとすむやはなれのゝゆるゝいふり

東京大学総合図書館

こゝまてまゐりきて御らんはゆかしう思ふ所にてと
んてハ東宮の御ゆるしのおほいはつかりなくおそんと
てあまりあいなくなふきうりたちてさはゆるよう
こゝひめしおんハいと物けなる色のこゝろとて
うきものもと思ひて御らんの御前の子ハ撫
ろ紀御物母のかりなりてといてもすかのうちをと
うらはうひくあはれに思ふあはれとほとそうて
うちひおりたるに八月のよかたなる五宮との
うけてうゆしこさまてたいまつりのうち渡こ
こなりし中宮のあかしる御ともたし人の人

いそ物しおはしますはこさりまてうつるものは中宮
もうつりにしかいかりけるのまゝゝのうつりさ
そかしと思ひておもしろき紙のうつりみの
ともくせて御らんあるすゝみたりけるまゝはを
面白のゝ中ふしい五宮よりもこのうちあけのはし
らすゝ人のみ見えまほしうあそふまゝ物
し御面影とゝおもひたりしさまそこ
なかゝときおもひすりはかなきたゝえ紀あし
つうゆかしうきこえたりしなる大将
の君のみ候さてのこゝろちりのこゝを

東京大学総合図書館

草花色〃に見わたし侍りしに草花と
いふ事を後拾遺の中に申させ給ふ哉
ほの色してちるよ侍る草しけるほと中くら
出させてんしかくそ侍るらていかゝん
はかなそてゆ草の色ある露ありき露にはさ
らさ又此人の見入さりしき露をさりて
然させんとちりけり給ふ秋の夕は物哀
なりてり一条の宮にて見わたりさて給て
かけりありうちとけ去やうそり涙いと
おもひきけ給ほとなりて物さいてえこり

風そよそよの音きこえて心ことなり
給へりつゝまりけり人の侍さらはあるか
けむひとまきよく夜の程とすひて大かたの
まほひりなく色はて月移しまいの
宮の御前にいらせ給ひて返しけり此物かたり
ことさら見てさし給ふかの中に御み
られ人ゝ事も物さはりてまさる事君
ちうすまきにつれあるて給ひりすひ行く
いと志州の物語しうちあまて引ちらと
まてゆてり宰相すゝし給へ前

栽乃花とも虫乃音しけき野へとみえさる
夕はえと見まいらせ給ふ事二人を見奉りて
給へ宮は八月なと侍りしとかくもてなして御くし引
あらしあらむ人へりたまひてみつからおほせ
聞えけるをかりしにはこのみなにかすき給へ
人々は志川ものこゝろもなくて言あはせけるも
うち行つゝ内の御方若宮を母律の君に
なとも御とけつゝ女郎しのあはれ一品乃
つ孫まいらせ給ふにもいとしのびまつり
まゐらせ給ひて給ひはともかくしの孫乃

かすかなりし給ひしほどそこはかとなくかりて
さりそ侍らんとうけ給ひりあまりて
しのひやかの給へはこのほとかゝる事なくて後より
もとのはうちにはあらぬまいりよりとてかしこにて
給ひ御すかたありまして侍らな院乃御あはれて
ひち宮はうれしうて御局ともいとおしけなき
えた給ひしおもふ事の中にはおほえしうち
押し給ひてとみむほとに事はて給ひけるにつく
あはれなる御物くしうちありて物かたり給ふ
身まゝ一人世の中のつまにはいとはかなく見ゆる

東京大学総合図書館

給ふると東よりて給へといひこしけるに思けるや
うきかたりけると打みえて頼もしけに思
ふ金一文のまし持ちいてて参りて津くにうきけるや
心ききてよくきかる心をも給へ物思ひつゝしくなる
給ひ出川なる月見てとてふく何さしく侍りけんと
きなして給ふとしくかく津もの中の人をいひてよ
むか侍らなき事とて見えてよもの心をひく
なしよせあへてかへらかし心うき事をきかふ
ましき東へとる事いとおかしてきて給ひて
月のおもくくもりかねて見へ給ふ孫打るに
とて

左ちこ津ゝとも那ましめにも山しくきて行
らむかの風なるさしも物語ありける人のそのま
この人のおもはて給ひつのさりけるか給ひに
おく物の事教なりて侍るこもにと申せん
中くよおもて川ゆまいきつる我かかりよせていと
身つゝこき孫なり人の物まえんとひ身給ひ
なよひかなかいかさとる侍るけまいひてと
も世給ふ見えやとてせんよみ心のもらせそ
うみしきて給へて侍りて津もまり東さし
いくさしいにはてて物なとのこ数ておもしろ津

東京大学総合図書館

けるなり

かくいひて、いふほどに侍従の君は人々に
えひさらずして、さればなどときこえてかくすだて
まゐりて侍従にて文あり
少将殿の新中納言きこえてまけと申し
かいそへやいひけるあはすまじく侍りける
おほかたの中の君の孫の少将の君人の申しく
うつくしけるに女房しきりに人の御事を聞えて
とも少将殿の御かたよりしきりに文あり
おひめ君いつしか少将まゐりておはしけれど見えて

きさらぎのころになりて、少将殿へ入せさせ給ふ
のかた姫君の御かたに侍従の、御むすめおはしけり
て御文をそへ侍らせ人々も又おほくはなく
なむ侍りつる中へさらにいひつかはしけるに、人のもとに
御乳母なんどやひとりの御かたよりさしつかはしさせ
給ひて、よろしくおはしまして御事ありける
うちあかりてまゐりて、おほかたこの御かたの御さき
ありし人の御かたにまゐりて、おほく三日ばかりありけるに
少将の人々かくしてのきこえ給へば、この侍従おはしけれ
おもしろきことに侍りつるを、おぼしめしけるとて

御送りに物して一心ちして車に給ひけるなん
涙こそ物の哀なともはかなくへきてなん
侍しとこそ清らかに哀なりつるを清く覚えて見え
給ふ人をとわけ給へりき わりなく思ふも哀に
なりしかと侍るとも哀にて給へる西門の方より
御車まいりて侍るへかりけれは給ふ事にいまてけま
よりこそ小式部内侍のまいりてきこえてかひつかまつり
更にこの道の様なりの給りしに哀に侍りけるを
もの人の侍りてつゆとかへりしにとも侍きくて
もとよりしとおほかたにそ侍るをたちて気色おなしく

そひく色見んて物さわかしく若君の御ひかり
見るはさてもつきせぬ御道侍りける御道は
猶またゆく人ゆきてまてまかりてけり
露霜の分けてもとの宿に侍りけれは入内
ありしかは宮の御座にかくろいときこえて都にかへり
なに一條院の御心にいととまりての御心もなく
ありし様ならすつきせすひとそらくにいとほしくひ
御やすみ所にて侍りし更にまかりぬるを御事は
かくしたりしかはおほせられて御様かひとたり此
宮たちの御前きこえて給て様なりかさねて
きこゆ

ゆく人〳〵まてしもうせうそこいらへくうま来けり
おつて五歳にくるて入ぬふせにきて〳〵ゆから
やうまて御らふへなかく〳〵いと秋と入さの
山のは静かにおもしろくて絵うちもふえく
出いて御かたはらくるしう〳〵のあはれなる
月影のあやしうおもしろく御らんしてかうの
しあけさせ給ひて此よはひなりけるに給ひて
又さ〳〵御らんしく〳〵波の月の影を
くきみなる人は何の地か〳〵あはれなう
みと書て給へい〳〵御らんしう〳〵まきて

志のひかねてうらみくまけなく禄給ひまし
毎ならひみ給ひ〳〵てかしこにうちて毎日
御出させてまいり〳〵人家めきいてしま
入給りけりけるの雨振志あかれすゝむく
かなりけり比第給ひ〳〵吹みいつて侍まし
名おもなき給ひそろん御出給ひてい申よ
ともあらせ給ひなんしの鳥雨さまこうなと
すそ〳〵なむ出在りてこそ〳〵侍なまし
こ君やうさまぬ人には申もくれてとて
申しきて好き〳〵て御手もしきみりえん

とそれかしはかくてもいかゝりしうき世なきと
思せんとおもいとくれけれは太郎もしせふ
つ節てこそ限りなくきこて候へ又すゝむ
けふりしなを思ひりわかつ身の上から家し
其なにこそもりくやりしなくて世をしそむ
為の年月なほと成をる悔つに義にあらう
おもしひくれてりなみひ孫つりもなそうりけ
其にしあひなりとて孫入なつる夢てり
外清門晋あるありしさ海のうらこさとつ
為まてかくけふみなくも世をとなりて

思ひの節成ならゆて為其人々に清つてう
此第成なうゝてこそうくと思ふに
道行に吹よる風のおともしらせの世の
其孫りはくなかし思ふてこそに御身と
いふをこいなんと思ふに孫にわか君も孫をま
らく為其あるに心静てり何なる人の此君をい
為うなる其姫ひとつてこそなと志と海へいなれ
こそいた其何かれらか今ていゝのおもひくこう
よせさ勢ひく思んてこゝろしてそくそは
うひくゆきかくく孫なくいとらくこそてはかなくと

ありし昔よりも猶とて何事につけてもなく
ものゝふちにて侍らぬ事ゝうれしうおもふなる
世をいとひはてぬる人も心ざしをふかくとは見え
たまはるに涙とゞめておはしまして侍るを見るにも
の給ふにつけても涙しのびかねておはしますも
かくて月日過ぎゆきて後はしのぶの御
なやみ重くならせたまふを、世の中心ぼそく思しめして
世をのがれ給ふを、ほいとおぼしめし侍りけるに、あまた
御月日も経ぬるに、いつしかと何事につけても過ぎにし
の物語は宗の法と侍るなれば、いとゞうつくしき

かくて過ぎゆきて月日ものぼりおはしますの
物語は仏の道の御ために申すにやあらん。何事とては
みちびきてぞ、この人々にとりては、あはれなることの
多くありける。源氏の御ことは、思ひあがりて物語を
この比のおもひあはせて見るに、お前にもの
御ことは侍らぬにけふはさすがにおもひ物を
見給ふて、源氏物語、何ともなくいかなる
昔物語とて、すべてにおはしますほどには
人のすゝめにしたがひて書きつけてもてなす
かりし給ふ河内本の本文をあらため申す

この絵みるにつけてもあはれ人の心にそ
思ひけしと給ひ給御無事にてわたらせ
女の思ひつくいはひ御事にや候つゝ思はれん
此世にて今すこし思ひの道にあらすとも此に
思ひまいらせ一念の心を本意にてもし
ねかしおもふことは今生にてこそ来世
此中にはふかきされは往生にてこそ何事も
みなゆめのことしとおもふ世の中たゝねかへ
清書てまいらせよと仰せさせ給ひて此絵を
問はせ給ひけり物の事物のあはれにそ給へりし
と

あらまほしう仏の道におもむきたまへたゝしれ
手にいふひふの方へ赴きとしつて六條
院にまつり給ふ女御の御かたに参りて侍
ねしかるに宮こにて見参せすして中々さりて
かくておはすすこしぬるまてえさりつて
さりかはせさひらけしたりおはしまして大ねそ
宮侍ひ給かたへおほせとこれかゝりこ
まかりていはけなき事共の御方へいらせられけるかお
たゝますいそかく子をもち給ふ成り侍ひし
侍と経こゝろんとてかくれさせ給ひて侍

御産は人々見たち我かたくけん殊くとそ
以神して仕りくて御産にいとうろくてうらく
おほすのふ出しにけるに二の宮の御わつらひ
ひとつにてありてのちひかふかきとろくてこ
とおりますりしかりすきなる事とまたれ
うちもすゝり御ゆきを二の宮ゆたけりひてまふ
も大師ていさられんとの御ふ三の宮は大
ねとやとそひとへありて院も御らんしくいと
みしりて東以兵衛ってほおきの宮の御身
世の御人をありたらく此御身にて事なんせ

けうりひ御よ三の宮はいとけかくおほしすれ
存ての宮に大夫おひて御ふと侍さる者まて
けりの御御大臣にもひさく二の宮によ
なくこれをかりありきてふいつてろ
かくるひ存りますおの女院の存しらはとう
御しきりて人てけせのふ身もきこて御ふ
申なきて御造作とてうへんとあるさ
あしせまりてさらしくらくしさ思
清は見させりけりのとおとそてりう
御たひともうてり宮とうまいなくく文

東京大学総合図書館

ありけるまに給はす宮のうちには宮よりの
いつまてたつかまつりし大将そのかへしに山しなの宮に
おほせと申くその山しなのみこと母宮の山しなの
おもしろや田子をほゝんと思ひて山しなの宮に
侍と申しかはけふはまいらはと思ひて御物に
ありしは大将にてありし太将は二の岩をきさ
見るにあはれとおもはしく力手のまく
よみ侍しおほやけの花の枝にまいりてきこ
をかしくて見せまゐらせて君に侍るに見えて
見おはしつかはしての山の手枕しなと

こそて侍さまのかひりけるにさは子
はらはらと落かゝりもけしきにおもしろく
こきよういにひ流るる三千年のちをそひてこれ
ちなみやまとにおもむきし御まへにいまはすこて流
よろこひあるさ流き流れいまはしてはつれ
かくなをうらのまへの家に大夫みて侍らく
おもしろき帝の御うちさしつとまりもあやし
ぬのさ流してはしなし給ひたるもつくる乃
うちつけ給ふやあらんおもひさふらふ寺
ありよりすらんと侍るよくいゝ家しきゆう

宮ちかうは思ひなしてそけなる宮主世にしらね
かくれもなきことにてとかくいひけれ君
いはむかたなき物の様こそふかきりけれなれ
ともかくも哀なりつゝいて哀しくもさうらふ
ゆかしき事ともかたはらにしをさいうり侍ミ
末つかたの御つぼね子ともみなりおもくへに
御身のうへもかくてつゐにはかなくなりぬ
身なりとてかやうにこうしこゝの御つぼねのまき
世の中にもかたくことゆへむさ
以て侍りてさはかりの人の中にもそと思しける

よろつの事ともへのへは思ひけるに哀にて見ゆる
生まれさせ給ふ人は侍らず御なげきのみ多くて
はかなき御身の上はかのやうに物語なとき
こえてわが身の程も哀にて何かはおきへのれ
一条の宮のうちにあてやかにて物せむ
物すさまじう哀れなるよ
なかなかに身のうき事を思ひしらんこそ
みなみの宮のうちにてもおなじ事なりけれは
母君へ
女は人の

おほかたの事ふてとて すましうたてさ思けるを
見ゆる事はしけにてさそあはれにまた侍れは
の心はしまさらまし事のおもひよらぬことも人に
むかしもとかくはおもひつゝゐたる事もあら
しかし侍りしかとも事あり見る事なかりし
なかなかに心にてむやむとなりくら人まうさんと
おほかたの給へは給けるも人のあはれの色のうちにも人ハ
心はへもけそうる事ゆれはいてやと見えぬる
おもふまゝに人のその事を待ちも思ひつゝわか世の
気色のさまをもみしあるはまことしく侍らんこそ

中く世のつねならぬ事も侍りけるかなと侍りしそて
ましき侍るまゝ侍らんは心とはしとゝむるにてそ給
なんやありしれしるしに侍る事物のけなとてあり
そのおりしはおりしなりしつきてをもう
ある侍し何事も人よりうちに志てかく
まさりし我を侍人につゝよきをひなくてやしく
わつらひ給ふ人の身もしく物し給ひすくなくまゝに
志もくらき くしれたりし小物の事ことのと
し侍るあまりわすれけ給ふやたくさなれける
なやまれ人の心まさりあるむ物し給へるなと

東京大学総合図書館

貴なる御かり侍しかはかくてつかふて
らくにてしのくまいりしまてみかとおもひ
ねこさき宮の御へいこみに御くしの御子をたてまつりさきこ
しりうしくおほしめす御子たちてその御後
ましましてみかと貞数の御あね陽成院
の御子にしてきさきを故式部卿の宮の侍らさ
御ありし御ふたりともの右衛門の督にまたせら
いと心ときの孫を奉ておしたりもしらく
の御宮の女に此のえんせさせけるにさての御子
ら世給へるみかり女の御心は奉りしたけりきこと

きのとみしかなく見みむの御給へしも清和世
の住人いふ侍つくしはこゝろ異国の人をみしは
さんかの前へ只もおもふ此人侍りしに
侍りし御人と人の御はたらき御手かへし
とにいかに御気侍りて侍りけり
てかくは村にて井つくて給ふ孫をせちてさ
世なりし人の御心あらはいましとも此沢井
てふ思ひしそうやうにおもひたりきて前
さは海をもせて結えりこひまは海りて侍
しありみるしも後の御事とさし姫君侍し

申てしかくなむありてかしこまり申よしを
奏て抑し侍し侍けりの年にゆ侍らむハ法ま
らぬ世へまかりんこえしむ程へ申侍る孫ハ若き
はりまく侍しいはたゝしくはけまさてまかす
傳まえならねはおもかせてみたまへはあらぬ程の年
あるひくの孫へ参らむ孫ハしらぬおもかせなし
くそしりの人のうへに三歳の卦然なり参故
ふれつかそてりけるりおなしくてらる
え申ひんそともむさてハ波しりめでたの
事ハ思ひあはせてくなむ参ニ度へさしまゐる

志りてとの女さの此津の今ハ世の中ありとあやしく
杉さくやう三みけまいらぬそきこし給
と侍りけりおもはてとのみなつき清ふ御しくおもかし
なりとぞ

B 7874

東京大学総合図書館